

五感から六感へ

—情報化時代のための読書(1)—

原 田 栄

人間の毎日の生活は、周辺の諸条件や社会的慣習との関連なしに営まれない。生命の維持に必要な衣食住などの物質的なものはもちろん、人間の向上に役立つ精神的なものも、本来的には個人自体に保有されたものではない。

この世に生をうけてからの人間の成長は、言語・服装・食事・社交・遊びなどの社会的慣習を習得することによってなされる。人間が人間として生きるということは、こうした社会的慣習の中においてである。

こうみえてくると、人間が生存するのは、その個人の恣意によるものではなく、社会的存在としてである。だからといって、個人が社会に埋没してしまうのではない。周辺の諸条件や社会的慣習は、人間個人の集団としての社会の産物であるのだから、個人と社会とは補完的關係にあるといえる。

人間が生きていくのには、周辺の諸条件や社会的慣習と無関係ではあり得ないとするならば、これらとの関連と対応のしかたが問われなければならない。



社会の進歩のテンポがゆるやかな時代にあっては、諸条件や社会的慣習の変化はほとんどないに等しく、文字通り十年一昔という状態であった。

こうした時代にあっては、他人の行動をまねることによって大過なく生きることができたのであった。しかも社会が安定しており、自然にできていたルートを歩めばよかったのであった。

しかし、現代にあっては、周辺の諸条件の変化は、とうてい昔日の比ではなく、日進月歩ならぬ秒進分歩といえる激変の様相がみられる。

人類の英知がこのような諸条件の多様性と変化性をひきおこし、主人公であるべき人間が逆に諸条件の多様性や変化性にふりまわされているの感がある。



安定した時代での周辺の諸条件や社会的慣習—環境への関連や対応は、前に述べたように「まねること」や「既成の事実に従うこと」が主であった。

例えば、農業生産についてみると、古来の農業技術を親から子へ、子から孫へと伝授し、受けた者はそれを踏襲すれば事足りるという状態がつづいたのであった。そこに長年の経験が尊重されたのであった。そうした経験はいいおせば知識の蓄積であり、視ることと聴くことによって得られたものであった。

したがって、この時代では、知識の蓄積によって環境に関連・対応したのであり、人間の能力や魅力の要素として知識が重視されたのである。この対応のしかたは、農業従事者が国民の大多数をしめていた日本では、早くみても明治初年、遅くみれば昭和20年まで続いたとみることができる。



ところが、現代の環境の激変には、既知の知識だけでは対応しきれなくなってきた。今までは「視」「聴」「嗅」「味」「触」などの五感によって知識を得て環境に対応してきたが、それでは不十分な時代なのである。

しかも、環境の変化はマス・コミの発達によって、速く広く知ることができるようになった。ここに情報化時代の到来をみることができる。情報化時代を主体的に生きるということは、そうした環境の変化に必ずしも外ならない。必ずしも、順応・適応・対応とあって、主体的であるためには対応であらねばならない。安定した、不変の環境についての十分な認識は「視ること」「聴くこと」で事足りており、そうした時代の人間の能力は、知識が第一義的に重視されてきたのであった。

しかし、既知の知識だけでは、現代の環境の激変には対応しきれぬものでなく、新しい対応のしかたが問題となってくるのである。

ここは、過去の五感以外のものが要求されてくる。その六感目は「捉える」ことである。五感を統合した「捉える」は情報化時代を主体的に生きるために必要となる。情報化時代の読書は、知識の集積から「捉える」ことへ変わってくる。(地理・世界史担当)

英語と課外読書

英語科 大 滝 真

中学校に入って始めて英語を学び、未知の外国語の持つ新鮮さ、物珍らしさも手伝って、最初のうちは興味を持って勉強するのだが、次第に数々の思いがけぬ困難に遭遇して自信を失くし、外国語をマスターすることが至難のわざであることを痛感する。何年やっても物にならない。それでは英語をもっと小さい時からやったらどうかというので、この頃では小学生の英語、幼児の英語、はては0才からの英語とますます年令を下げる傾向が見られ、学ぶ本人より親の方が躍起になっている有様だ。幼い時期に絶えず外国語の音声を聞かせそれに慣れさせれば、確かに耳の訓練にはなるし、将来有意義に働くであろうことは生理学的見地からも言える。生理学では母国語の習得のメカニズムが理論的に研究されていて、生まれてから満9才～12才までに入った言語は母国語となり得るが、それより年令が進んでから入った言語は母国語には断じてなり得ないといった悲観的結論が出ているのだが、これは人間の脳髓(大脳)がそのように出来ているためであって、実験的にも立証されている。要するに英語国民あるいはそれ以上に、というのは無理な話なのだ。しかしそれは言っても、外国人の生の音声を聞く機会に恵まれていない日本では、理想通り事が運ぶわけにはいかなから、現在の置かれている状況を出来るだけ活用し改善してゆくより他に方法がないであろう。

では英語の力をつけるにはどうしたらよいか。語学力の上達を望む人が極めて多いことは、「英語に強くなる本」がベストセラーになったことからわかる。「もうチョットで英語が話せる」式の本が如何に多いことか。だがここで一寸考えて欲しい。果たしてそういう類の本1冊位で英語の力がめきめきつくかどうかということ。語学の学習には根気がいる。練習を積むことが何よりも肝要である。三日坊主では上達は覚束ない。出来るだけ安易なやり方を選ぶのが当世の風潮ではあるが本1冊で何とか、と甘い考えを起こすことは禁物である。英語の実力は一般に聞く力、話す力、読む力、書く力の四つから考えてみる事が出来る。がここでは特に読む力に限って話したい。読む力、いわゆる読解力をつけるには、多読が一番よいように思われる。教室では語・句・構文の意味を究明し、文法的説明を行なう精読が普通であるから、比較的容易な内容の面白い本を選んでどんどん読み進んでゆく習慣をつけるようにするのがよい。教科書はページを追って段階的にむずかしくなっていくが、物語や小説はそ

ういうことはない。最初の1ページを読み、その力で次のページも……というようにして読んでゆくと、自分でも驚く位読む力に加速がついて行く。こうして1冊を読了すればこの自信が次の本を読む時の支えとなる。(読み終えた時の感激は一人である。)読んでいる時知らない単語、わからない箇所があっても余り神経質にならず、慣れるにつれコンテキスト(前後関係)から辞書を引かずに単語の意味を大体推察出来るようになる。多読は語句についての知識を豊富にし、英語を書いたり話したりする時に表現力の一部となって生きて来るのである。余りに凝った文体、古めかしい表現や、くだけ過ぎた俗語・単語の多い、あるいは方言に富む文体のものは避けた方が無難であろう。次に一応の目安を示すことにする。

低学年向きとしては、アンデルセンやグリムの童話集あたりから入って、Arabian Nights, Fifty Famous Stories, Stories from Shakespeare などへ進み、更にBiographical Stories, Black Beauty, Alice in Wonderland, Kwaidan, Daddy-Long-Legs, Little Women などへ向うのが適当ではないかと思う。1年生あたりは物語、2, 3年生あたりは推理小説・ロマンスものなど入れてもよく(尤も実力がありさえすれば何でもよいわけだが)、上学年生は随筆・小説・論文と何を読んでもよいであろう。古典や名作では書き直し(retold)されたものもかなり出て居り、1,000, 2,000, 3,000語といった単語の難易によって等級をつけ、シリーズもので出しているところもあり(Ladder Series, Longmans 社など)、西部劇の「シェーン」や「宝島」・「クリスマス・キャロル」など手頃なものも読めるし、又世界の名作を英語以外の外国語から英訳したもの、例えばトルストイ、モーパッサン、モラヴィア、川端、夏目、谷崎、三島などの作品も英語で読むと不思議にやさしい。かつて高校生の頃ゾラの「居酒屋(“Drink”となっていた)」とモーパッサンの短編集の英訳本を読んでその平易さに驚いたことがある。上学年ならモームやヘミングウェイのある作品、あるいはコナンドイルのもの(「シャーロック・ホームズ物語」)、新らしいところではA・クリステイの作品位なら結構読める(害である)から、自分のポケット・マネで洋書を買ってみるのも楽しいものだ。T・ハーデイのAlicia's Diary やパール・バックの作品(文体が実によい)なども面白く読めるし為になると思う。ペンギン文庫や一寸表紙がけばけばしいがアメリカのペーパーバック(紙表紙本)あたりを手にとって恰好の本なら思い切って買って見たらどうだろう。本代を惜しんではいけない。

英字新聞、例えばYomiuri, Mainichi, Asahi Evening News, Japan Times などから自分に合ったものを選んで読んでみるのも時事英語に慣れる意味でプラスに

なる。全部読もうとしないで読めるところだけでも読めばよいと思う。3年位になったら英英辞典を利用するのも有益である。英和辞典ではわからないことがわかり、英語の表現も身につく。

最後に英語の勉強全般について一言したい。学年を問わず中学のテキスト(特にBook 1と2)を全部暗記して欲しいことである。私も中学・高校の頃夢中になって教科書を片っ端から暗記し、今でも口からそっくり出て来る箇所もあって知らないうちに役立っている。これを是非実行してもらいたい。英語を話すにしても書くにしても、英語の基本的な文や慣用的表現は頭に前もって積み込んでおかないことには、いかに頭を振り絞っても出て来る筈がない。頭に積み込むには繰り返し練習する根気と飽くことなき意欲である。T V、ラジオ(FEN, VOA, BBC)、テープレコーダーなど大いに利用してみるとよい。外国映画を見たり、文通したり、何でもやってみることで、外国語は半年なり一年なりあたかも熱病に冒された人のように旺盛な意欲でガムシャラに夢中になって勉強するような時がないと、大した力はつかないのではないかと思う。寝言に英語が出て来たり、夢の中で英語で外人と話している自分の姿を見たりするのは、こういう熱中の最中によく見られることで、私などこうならないと本格的でないように思っている。どんな英語の達人でも或る時期には必ずこのような熱狂の状態があって、人知れず猛烈な努力をしている。松本幸著「英語と私」(英友社)、種田祥豊著「20ヶ国語ベラベラ」(実業之日本社)など一読すれば参考になる点も多いであろう。「Good medicine tastes bitter.」である! さあ諸君、食欲なまでの食欲で、目指す(英語)にかぶりついて欲しい。

物理読書案内

物理科 根本信行

物理学を学ぶにあたって図書を利用するのは有意義である。じっくりと物理学を学ぶためには、やはり力学関係の古典的な本から読み始めなければならないと思われる。しかし、その前に高専生としては、入門的な本を読み、物理に対しての壁を除くことも良い方法であろう。以前から岩波書店の文庫、新書等に良書が多いが、最近ではさらに東京図書の科学普及新書、講談社のブルーボックス等、無数の本が入門書として出版されている。筆者は、それらすべてを読破している訳ではないので、どれが一番良いかを熟知していない。けれども、読書をする者の常として、先ずどれでも一

冊を手にとって読むことを奨めたい。どの本も学問的に業績を残した人々が、物理の本質をわかりやすく説明しようとしている。ここではブルーボックスと科学普及新書から2冊ずつの本を紹介しておきたい。但しこれだけではなく、どれでも良いから少なくとも一冊くらいは、夏休み中に読んでもらいたい。

「新しい物理学・ガリレオから素粒子論まで、現代人の物理読本」ブルーボックス

これは物理の歴史を追いながら物理の本質を解き明かしている。さらに、エピソードとして物理の周辺について、即ち他の自然科学や工学との関連などにも及んでいる。この本は、一、二年生にもわかるし、物理を一通り学んだ上級生にも適した本である。

「相対性理論の世界」ブルーボックス¹⁾

相対論という難しいのではないかという考えだけが先に立ってしまうようであるが、この本では相対論のできあがる過程をわかりやすく説明している。そして、相対論の実験的な証明、つまり相対論が表われている現象を因入りでおもしろくわからせてくれる。また相対論を基盤にして、今後の物理の発展する方向を示している。

「宇宙と新しい物理学」科学普及新書

物質の第四の状態としてのプラズマについて、その性質や今後それがどのように利用されていくかが書かれている。宇宙を構成する物質の殆んどはプラズマ状態になっており、話は大きく宇宙全体に広がっている。これからの自然科学の対象は、超真空、超光速、極低温等々、我々の想像力では及びもつかぬ分野にまで話が広がり、非常に興味深い。またこの本では、宇宙を構成するものとして、固体、液体、気体、プラズマの物質の四つの状態と重力場、電磁場、核力場の三つの場を七つのエレメントとして話を進めている。

科学普及新書は、ソ連の本の翻訳であるが、ちょうど中学生から高専生くらいの学生を対象に書かれているものが多く、どの本もわかりやすい。

「量子力学入門」科学普及新書

相対論と量子力学は現代物理学にとって、基盤になるものである。そこでは、我々の体験、目に見える現象から考えると信じられぬ現象が起こっている。これを理解するには、創造力と柔軟な頭が無ければいけない。この本は量子力学の理解を助けてくれるものとして、十分に役割を果たしている。応物では、四年生に

対して量子力学が教えられるが、一読の価値がある。
以上四冊を挙げたが、岩波新書の『物理学はいかに
創られたか』もアインシュタインらによって書かれて

おり、世界的な名著である。また、『近代科学の歩み』
は、低学年生にも十分理解できる内容であり、科学の
歴史の大纲を捉えることができるので奨めたい。

学 生 論 文

ま え が き

今回は、5年生3名に、自分の思想を語り、かつ、その思想の拠り所となった書物の紹介をしてもらった。何しろ限られた字数で「意のある所」をまとめてもらうのだから、さぞ苦勞したことと同情している。

下級生諸君は、上級生の言葉のなかに、自分と同じ考えや悩みを発見するだろう。あるいはまた、今まで考えてもみなかったテーマを発見して眼がさめる思いがするかも知れない。教官のみならず上級生もまた、人生の先達である。これらの先賢たちが、迷いながらも自分の脚で一步一步踏みしめてきた道を、後輩の諸君たちも、自分なりに踏みかためて歩いてきてもらいたい。今回の試みがその際の手がかりとなることを願っている。

編集子

生きてゆくこと

人は誰でも、
ある年令にな
ると必ず、生
きてゆくこ

5D 佐藤彰芳 生きてゆくこ

とへの疑問にとりつかれる。同時にそれは、死、愛、人間、宇宙、時の流れ、神などの問題へと発展してゆく。何のために生きるか。または、なぜ生きるか。どこからか、しかし必ず自分の内なるものの中からこの間は生まれる。そこで闇の中へと旅だつてゆく。いつ解けるかわからぬ問の答えを求めて。

まず二つの道がある。ニヒリズムへの道と人間らしさという曖昧さへの道である。つまり、どうせ最後には、死んで行くんだ』という言い方と、「最後には死ぬにしても、その間には何かあるだろう』という言い方である。

前の道を行くと、その終りに自殺という崖がある。純粋に越えるなら方法もひとつ、餓死である。その他はみな逃避にしかならない。なぜなら数ある自殺の中で、自分が死にゆく過程を、強固な意志と理性で見つめながら、実感としり湧き上がるであろう恐怖に耐えるような自殺—そこまで死を欲するなら、虚無的とは言え、ひとつの真実になりうると思える—は餓死しかないからである。

後の道を行くなら選択を強いられる。運命は存在—この場合は実存だが—するか。否か。ぼくは存在する

と思う。なぜなら偶然は必然の積み重ねであるから。こういう言い方では、偶然イコール必然にもなる。つまり偶然何かが起つたという事は、それが起るまでの一分のすきもない必然があつたという事だから。

さて運命を認めて前へ進もうとすると、また分れ道にでる。死を恐れるか。否か。およそ動物の中で死を本能的に恐れないものはない。人間だつて例外ではない。むしろ理性ゆえに著るしいかも知れない。逆に理性ゆえに死が恐ろしくないとと言えるが。

そこで死を恐れると言うのなら、道は非常に狭くなる。なぜなら、いわゆる若さという言葉が最も値いすべき、前へ進むためのエネルギーが失なわれてしまう。つまり死ななければいいことになるわけだから、そこには生への欲求は存在しない。自分では意識しない死がそこにある。ただ死を恐れるあまり、その恐れを逆手にとって生への欲求へ変えることは可能だし、死を恐れる人はそうすることによってのみ前へ向つて生きてゆける。

かくして、なぜ生きるかに対する理想論的解答を得る。つまり死を恐れはしないが、より欲して生きてゆくという答えを。さらに意識せずに生を、よりよい生を欲するまでに。

そこで第二の間は続く。何のために生きるのかである。前問の答えは割合一般性を持つていると思うが、この問だけはあらゆる答が出る。なぜなら各個人が、

それぞれにしか通用しない答を持つから。「おまえの言う事は理解できるが納得できない」というような言葉がぼくを待っている。そこでぼくの生き方だが、一例として記したい。ぼくは何のために生きてゆくのか。ぼくはこう思っている。つまり自分のために生きてゆきたい。自分の良心を大切にしたい。誰をも傷つけずに素直に生きてゆきたい。なぜってぼくは本当に人間が好きなんだから。ただ間違えないで欲しい。人が自分のために生きていく時、そこにはエゴイズムという落とし穴がある。ぼくが言ってるのは全然別なことなんだ。本当にいやつららしい例なんだけど、シュヴァイツァーがある。彼はなぜアフリカくんだりまで行って黒人に尽くしたんだろう。人道主義者ってことになってるけど、ぼくはこう思う。彼の行動は最後まで自分のためだった。彼の神に対する敬謙さが、現実的に彼を苦しめ、それから逃れるために彼はあの行動をとった。そこではじめて彼は安らぎを得たと。主観的かつ独善的な解釈だけど、こんな感じの自分のためということなんだ。

だけど二つの問に対する答はまだ完全じゃない。つまり実践という面で。知ってて行わないということは知らないと同じになる。行動の重要性がそこにある。自分なりの考えを行動に移せた時、生への疑問は本当に解決する。それは皮肉なことだけど、ぼくが死ぬその時わかることだ。だから自ら背負った荷物とそのおかげで感じられる大地の確かさによっていつも前向きに生きてゆくだらうと、ぼくは今思っている。

「生きてゆくこと」、このテーマについての議論は古今東西枚挙にいとまがない。いわゆる哲学者の手になる著作もさることながら、ここでは文学作品をいくつか紹介しておく。文学作品は、人生論の入門書であるとともに、一つの（作者なりの）到達点でもあるからである。

「次郎物語 全巻」下村胡人著 旺文社文庫
 「城の崎にて」志賀直哉著 同上
 「生まれ出ざる悩み」有島武郎著 同上

明日に生きる仏教

最近、西洋

5 M 佐藤和男 思想が行きづ

まりに来てお

1. よみがえる仏教 かり、明日の世界を開く思想は東洋思想（中でも仏教）である、と言

っている歴史家・思想家が多くなってきている。中でも、歴史家であるトインビーや、近年なくなった、ドイツの哲学者カール・ヤスパースなどは、特に仏教を高く評価している。彼らは仏教に注目している一つの理由として、釈迦が生まれた時代に現代は非常に似ている、と言っている。西紀前、人類は農業改革により、高い物質文明を生みだした。しかし、そこにはそれだけの物質文明を導き、人類を導く精神の原理を持たなかった。そして、そういう時代に生まれたのが釈迦であり、そこに精神革命が行われた。現代はまさに、西紀前 800年から 400年頃と同じようである、という。巨大な工業革命が行われ、そして人類は、巨大な生産力を獲得した。しかし、人類は、人類を導く新しい精神の原理をまだ見出しはしていない。いまや、巨大な科学技術文明に魂が求められ、第二の精神革命が必要とされている。彼らが仏教に注目している、もう一つの理由は、仏教が新しい思想である、ということである。このような事を言うと、何を言っているんだ、2500年も前の思想じゃないか、と言われるかも知れない。しかし、仏教が本格的に研究されて来たのは、19世紀からの事である。日本仏教の歴史は、シナ仏教と鎌倉仏教の歴史であり、残念なことに原始仏教の研究が行われ出したのは、明治中期以後のことである。仏教聖典の言語であるパーリ語・サンスクリット語の研究が行われ出したのが、16世紀のことであり、それもヨーロッパ人の手で行われ、近代仏教学が成立したのは、前にも述べたように、19世紀からのことである。原始仏教の研究により、現代に至って初めて我々は、インド仏教、そして人間ゴータマ・ブッタ（釈迦）を知ることになったのである。

2. 人間ゴータマ・ブッタと彼の思想

ゴータマ・シッダルタは、西紀前 5 世紀、現在のネパールのルンビニー地方に、シャカ族の王子として生まれた。そして、出家するまでの 29 年間、非常に裕福な生活を送っていたことが知られている。しかし、彼は 29 才にして、地位、財産を捨て、妻子までも捨てて出家したのである。では、何故に彼は、これらを捨ててまで出家したのであるだろうか。後年の彼の述懐から、出家の動機を探ってみると、一言で言えば、「人間の有限性への挑戦」と、言うことができるだろう。何ん自由のない生活を送っていた彼が、ふと自己の存在を省みたと、そこには、病み、老いゆき、やがては死んでゆく自己があり、又、他人の老病死を見ては、恥じ、嫌悪する自分の姿があった。彼は、この人間の有

限性による不安、苦からの解決を目指して出家したのである。ヨーロッパ人の言う如く、まさに「偉大なる放棄」(the great renunciation)であった。

彼は出家して、7年間の難行苦行の末、アシヴァッタ樹のもとで瞑想し、やがて悟りを開いた。世界思想としての仏教が、このとき確立したのである。後代の仏教では、ゴータマが出家したのは、衆生を救うためであった。などと言っているが、彼が悟りを開いた後、伝道を決意するまでは、そのような意志は全然なかったのである。さて、彼が菩提樹のもとで悟ったことは、一切の存在の法則性としての「縁起の法」であった。縁起とは「縁りて起こる」、つまり「条件による生起」ということであり、一切の存在は、諸々の因と縁によって作り出された諸要素の集合体に他ならぬ、ということである。自説経によれば、「此有れば、彼有り。此滅すれば、彼滅す。」である。この縁起の法を人間にあててみたとき、彼の出家以来の課題であった、人間の有限性の問題も解決されたのである。そして、この理法から導き出されるのが、「無常観」であり、「無我観」である。

すべての存在は、因と縁により存在している。だから、因や縁の生滅により、すべての存在も生じ、又、滅する。この世界に固定した存在は、法(dharma)を除いては、ひとつもないのである。また無我観においては、我ならざるもの(非我)を、我(アートマン)と見なすことを排折している。一切のものが、縁起の法則によって存在するのであるから、何ものも「わがもの」とか、「われの所有」ということはない、と主張したのである。

しかし、彼は決してアートマンが存在しないと説いているのではない。むしろ、自己を自己として追求することを実践目標としている。このことは、彼が死を前にして弟子たちに説いた、「白灯明・法灯明」の教えからも知られる。法句経によれば、「己れこそ、己れの寄辺、己れを措きて、誰に寄辺ぞ、よく整えられし己れにこそ、まこと得難き寄辺をぞ得ん。」とある。つまり、己れの依り所となるのは、あくまでも自分であり、その自分とは、法を体得した自分なのである。悪徳煩惱の自己は捨てられ、法に依る自己が実現される。そして、その際の行動の主体となるのは、あくまでも個人的自己であり、自己を救うのは自己のみである。この点において、絶対者としての神の存在を前提とするキリスト教とは、根本的に異なるのである。

紙面の都合上、後は仏教書の紹介にとどめることにして、最後に、増谷先生のことばを借りれば、仏教とは、「人間開発のための自己形成の道」であり、「人

間精神の耕作という原則が、貫かれている生活」であることを記して終りとしたい。

今後の仏教に期待すると共に、これが少しでも読者の「他生の縁」となることを念じている。

3. 仏教書の紹介

- 「原始仏教」 中村元著 日本放送協会 340円
 「原始仏教」水野弘元著 平楽寺書店 950円
 「知恵と慈悲」増谷・梅原著〈講座・仏教の思想1〉
 角川書店 580円
 「仏教とキリスト教の比較研究」増谷文雄著
 筑摩書房 620円
 「慈悲」 中村元著 平楽寺書店 950円
 「ゴータマ・ブッダ」 中村元著 春秋社2500円
 「原始仏教の成立」 同上 同上 2000円
 「原始仏教の思想 上」 同上 同上 2500円
 「原始仏教の思想 下」 同上 同上 2000円
 「ブッダのことば 中村元訳 岩波文庫
 —スッタニパーター— 150円

勝利をめざして

—僕とキリスト教—

僕が中学校

から剣道をは

じめてから今

5C 本 田 彰 年でちょうど

8年目になる。その割には、いっこう技の方は上達しないのであるが—。

そんな状態でも、様々な段階を経てきた現在一つだけ教えられたことがある。それは、「勝負とは自分と向っている相手が敵ではなく、実際は自分自身が敵であってその自分との戦いが真の勝負である。だからその自分に勝利したものは、最終的に勝利するのである。僕は、そうわかって、いつも練習しながら、弱気な自分に誘惑されるのである。それは、「もういいじゃないか。どうなってもいいじゃないか」というあきらめの気持ちと投げやりの気持ちである。その気持ちを持った時は、必ずといってよい程相手によくやられるのである。つまりそういう時にいつも、自分に負けているのである。しかしその反面僕は、勝利したい気持ちでいっぱいである。

そのようなことでいつも僕の心の中には、相反するものが存在して、それらがお互いに、争っているのだらう

一体、同じ自分なのに、何故そのようになるのだろうか

か。何故なんだろう……。

ある人は、「私は思ったこと百パーセントできなくてもしようがないと思う。又そう思ったところでどうにもならないじゃないか」と言う。しかし僕にとっては、しようがないですまないのである。又ある人は、「私は、思ったことは必ずやれる。又やれるという自信がある」と言う。しかし僕には、そのような自信がないのである。そう思いつめた時、必ず一体自分自身は何なのかという疑問がたえずおきてくるのである。

ある時、僕は、パスカルのことばを思いだし、何か自分に迫るものを感じた。デカルトが、「我思う故に我あり」と言って、人間の理性と思考を重視したのに対しパスカルは、もっと深く突っこんで、「人間は、考える葦である」と言って、人間を1本のアシ草のように全く弱いものとしてとらえたことである。あの偉大なパスカルでさえ、自分を徹底的に弱いものとしてとらえたと思うと、この自分は、一体どんな存在になるのかと反問せずにはいられない。パスカルは、そう思ったからこそ、絶対なる神に求め、絶え、祈り続けキリストと共にある人生を、厳しく歩んだのだと思う。僕は、そのように究極的には、自己否定の道にこそ、本当の自己実現の道があるのだと信じる。そしてその道こそ本当に力に満ちた、希望にあふれた道なのではないだろうか。だからこそ次にやってくるかも知れないより厳しい試練にむかって、希望をもって向って行くことができるのだと思う。

「門をたたけ、そうすればあけてもらえる

であろう。すべて求める者は得、捜すものは見だし、門をたたく者は、あけてもらえるからである。」—ルカ (11:9~10)

ダグハマーショルドの書いた道しるべの中に次の

ような言葉がある。

「他人に対して寛大である権利を有するには、まず自分自身に対して厳しくあらねばならない。」

「他人の弁護を求めながら自分の利益を求めようでは、成功は、おぼつかない。相手の外側を見ながら、相手の困っている事情を本人の身になって感じとれるような立場に身を置くと、おまえは、はじめて次々に永続きのする解決を期待してよろしい」

絶えず自分自身に厳しくあった人は、他人に対して寛大になれるし、人一倍思いやりの強い人間になることができるのだと思う。それが本当の人間の誠実さではないだろうか。それが全く反対になった時に、お互いに、憎しみ合う関係になるのではないかと強く感じる。お互いに誠実さをもって交わることが、共に喜び、共に励まし合い、助け合う道の出発点だと思う。

僕は、捨て身になって、主と共にある人生を絶えず厳しく送り、祈りながら、人生という大勝負に勝利したい。その勝利めざして1日1日を精一ばい生きたい。

「勝負の為に馬を備えよ。

勝利は主による」

最後に、勝手ながら、僕の導きとなった書物を2、3あげておきたい。

何らかの参考になれば幸いである。

「聖書」 日本聖書協会 (¥ 700)

「道しるべ」

ダグハマーショルド著—みすず書房— (¥ 450)

「日本で一番好かれた男」

(西郷隆盛という人間について)

鮫島志芽太著 一講談社 (¥ 450)

新着図書目録

*印は図書館、他は各教育の研究室に所在

総 記

日本の図書館 1969		日本図書館*	
加藤宗厚	図書の分類	理想社 *	
宇野哲人	論語 上	中国古典新書	明德出版社
山	同 下	同	同
山室三良	老子	同	同
田所興行	孫子	同	同
天野鎮雄	公孫龍子	同	同
今井宇三郎	素問	同	同
原田補成	貞観政要	同	同
山田静英	塩鉄論	同	同
村上嘉実	抱朴子	同	同
高田 亨	馬子	同	同
佐野太郎	大学・中庸	同	同
阿部吉雄	荘子	同	同
市川任三	十八史略	同	同
柳町達也	蒙求	同	同
小野沢清一	韓非子	同	同
鈴木由次郎	漢書藝文誌	同	同
鎌田正毅	春秋左氏伝	同	同
佐藤一郎	唐宋八家文	同	同
内田眞之助	白氏文集	同	同
沢田正賢	戦国策 上	同	同
荒城孝臣	列女伝	同	同
沢田正	戦国策 下	同	同
橋本祐次	文選	同	同
高木友之助	説苑	同	同
大野敏	園語	同	同
佐藤仁	朱子行状	同	同
穴沢誠雄	列子	同	同
安斎青山	論語	同	同
沢口繁雄	案府	同	同
荒木見悟	竹密隠華	同	同
遠藤哲夫	小学	同	同
山田琢	孟子春秋	同	同
柿村敏	管子	同	同
宮川尚志	三国志	同	同
山根三芳	正蒙	同	同
越智重明	晋書	同	同
石川梅次郎	論語注	同	同
八木沢元	世説新語	同	同
清水孝	庖子	同	同
星川清孝	楚辞	同	同
岡田武彦	王陽明文集	同	同
市川本太郎	文中子	同	同
綿田至善	後漢書	同	同
渡辺卓	孟子	同	同
竹内照夫	資治通鑑	同	同
	大日本百科事典16	小学館 *	
	朝日新聞縮刷版46-2	朝日新聞社 *	

森清	日本十進分類法	日本図書館協会 *	柴田徳術	現代都市論	東京大学出版局	印東太郎	確率および統計	コロナ社
日本の名著41	内藤湖南	中央公論社	磯村英一・他	都市問題概説	東京大学出版局	近藤次郎	積分方程式とその応用	同
杉浦正	新聞事始め	毎日新聞社	クリスタラー	都市の立地と発展	大明星	田辺行人	ベクトル・テンソルおよびその応用(1)	同
日本の名著23	山片鯉桃	中央公論社	津浦弘之	人の動きと社会的空間	同	斎藤一夫・他	無機化学の基礎	大日本図書
デザイン編	編集ハンドブック	ダビッド社	W・ゼリンス	人口、文化、地域	同	C, F, Bel	無機化学	東京化学同人
島芝			キー		同	1 他		岩波書店 *
トマス・J・	社会と図書館	日本図書館協会	千葉徳爾	地域と伝承	同	今井功	流体力学	岩波書店 *
ガルワイン			矢島一彦	都市プランの研究	同	リーブマン	気体力学	吉岡書店 *
戸田俊一	校正ハンドブック	ダビッド社	同	幕藩社会の地域構造	同	ロシュコ		
朝日新聞東京	一冊の本	営華社 *	同	幕藩社会の地域構造	同	パチエラー	乱流理論	同 *
本社学芸部			山奥誠次・他	東京周辺都市の研究	同	ゾンマー	理論物理学講座 I 力学	講談社 *
丸山昭二郎	洋書目録マニュアル	日本図書館協会	岸本実	人口地理学	同	フェルト		
			講座・都市と大都市地域		同			
岡野他家夫	近代日本名著解題	有明書房 *	国土 I		東京大学出版会	同 II	変形体の力学	同 *
世界の名著41	ラスキン モリス	中央公論社		日本都市空間	彰国社	同 III	電磁気学	同 *
古事類苑 2	地部一	吉川弘文館 *	大友立也	アージリス研究	ダイヤモンド社	同 IV	光学	同 *
同 3	同 二	同 *	地域開発研究	実践する都市	大明星 *	同 V	熱力学および統計力学	同 *
同 4	同 三	同 *	実所			同 VI	物理数学	同 *
同 19	政治部一	同 *	清水善八郎	都市の魅力	東京大学出版会 *	同 VII	光、熱、波動	同 *
同 20	同 二	同 *	岸本実	日本の人口集積	古今書院 *	E, シミゴ	原子物理学 I	東京図書 *
同 21	同 三	同 *	林雄二郎	社会学	筑摩書房 *	ルスキー		
同 31	器用部一	同 *	三輪和敏	図書館教育と視覚教育	創元社 *		PSSC物理上	岩波書店 *
同 32	同 二	同 *	京口和雄	体育科 主体的学習の実践	明治図書	大塚好治	分析化学実験	学芸出版社
同 33	服飾部	同 *	吉田清	新訂 安全教育	不昧堂	三根久	情報理論入門	朝倉書店 *

哲学

岩波講座・	哲社会の哲学	岩波書店 *	千原恒三郎	地方議会 議案のつくり方	学陽書房 *	同	防炎指針第 1 集	同 *
学 5			見方			同	同 II, III, IV, V, VI 集	同 *
鎌子二郎	世界の文化地域と宗教	大明堂	末川博	岩波基本六法 昭和46年版	岩波書店 *	高木貞恵	硝子細工法	三共出版 *
J・D・カ	攻撃性の自然史	ベリカン社 *	メダル・ベア	チーム、ティーチング	東洋館出版	物性、編集	ものをきれいにする方法	横書店 *
ーシ・他						委員会		
田中英知太郎	フキユガイアスの場合	筑摩書房 *				H, シスラー	非水溶媒の化学	共立出版 *

歴史

	日本と世界の歴史19	学習研究社 *	アーサー・バ	現代物理学の基礎	好字社 *	武内次夫	他 原子吸光分光分析	南江堂 *
岩波講座	近代史 6	岩波書店 *	イザー			石橋弘毅	活活便覧	横書店 *
世界歴史19			L. シュワ	物理学の方法	岩波書店	Thomas R	化学と電子計算機	広川書店 *
日本地誌研究	日本地誌 4	二宮書店	ルフ			Dickson		
所			田中興雲	科学論文の書き方	営華房	化学工学協会	物性定数 1 集 1963・	九番 *
奈良市史	地理編	吉川弘文館 *	アインシュ	アインシュタイン選集 1	共立出版	同 2 集 1964		同 *
竹内均・他	新版 地学辞典 I	古今書院 *	タイン			同 3 集 1965		同 *
片山信夫・他	同 II	同 *	藤田秋治	栄養学 食品学を主とし	養賢堂	同 4 集 1966		同 *
山奥誠次	都市近郊	同 *	他	た 生物化学		同 5 集 1967		同 *
コンスタンチ	日本文化と地理学	同 *	渡田久彌	他 解説栄養化学	いづみ書房	同 6 集 1968		同 *
ン・ホボフ			上田陽	機器分析	広川書店	同 7 集 1969		同 *
能登志雄	渥路熱帯	朝倉書店 *	A・D・Cro	赤外線吸収スペクトル	東京化学同人	同 8 集 1970		同 *
川喜田二郎	ネパールの人と文化	古今書院 *	ss 他	入門	同	T, M, ウ	電析と腐食	産業図書 *
ウィリアム・	第三帝国の興亡 I ヒトラ	東京創元社	R・A・アイ	定量分析化学	培風館	エースト		
シャイラー	ーの台頭		菅原健	基礎応用定量分析	朝倉書房店	鎌谷勤	化学反応の速度論的研究法	化学同人 *
同 同 2	戦争への道	同	奥野久彌	無機分析実験室ハンド	東京化学同人	J, D, Lee	基礎無機化学	東京化学同人 *
同 同 4	ヨーロッパの征服	同	他	ブック		田中信行	無機反応機構	化学同人 *
同 同 5	ナチ・ドイツの滅亡	同	田中孝昭	他 有機分析の基礎と演習	工学図書 *	井伊谷潤一	粉体の物性と工学	同 *
ロージャー・	第三帝国と責任	同	北原三郎	一般課程 化学	培風館 *	仁田勇	固体の構造化学	同 *
マンガエル			畑晋	一般化学概説	横書店 *	藤永太一郎	非水溶液反応	同 *
			山田直平	ラプラス変換 演算子法	コロナ社	村橋俊介	有機金属の化学	同 *
	日本観光地図	国際分業 *	赤岡清市	級数および直交関数系	同	藤田耕三	合成と溶解のための溶媒	丸善 *
			末坂隆	数値計算	同	松下雪郎	有機酸その他の分析と特	講談社 *
			本間仁	他 次元解析 最小 2 乗法と実用	同	石川基	他 化学者および化学技術者	東京化学同人 *

社会科学

服部秀三	精解演習 電子回路論Ⅱ	田広川書店	立花太郎 他	実験室における電気技術	東京化学同人	泉弘志	図解エレクトロニクス製作集	同人
電算機講座2	電子計算機のシステムプログラム	学報	小野田壽	化学技術者のための初等電子技術読本	オーム社	電子展望編	リレー応用技術	同人
電気学会通信教育会	電気回路論	電気学会	石橋弘毅	溶剤便覧	横書店	広瀬義男・他	自宅用電気設備 保守点検、試験マニュアル	オーム社
同	原子物理学 物性論	同	有機合成化学協会	新版 染料便覧	丸善	潮恒郎・他	しや断石、選道器	東京電機大学出版局
同	電気材料便覧	同	加瀬敬年 他	めつき技術	日利工業	中山健一・他	配電盤、制御機器	同
同	原子力発電	同	田島栄	新版表面処理ハンドブック	産業図書	藤原明吉・他	高电压工学	朝倉書店
赤尾保男 他	電気回路論	広川書店	J・M・ウエスト	電析と腐食	同	電気学会通信	電気機器工法Ⅰ、Ⅱ	電気学会
電気学会通信教育会	自動制御	電気学会	芝原芳雄	最新分析化学22集(1971)化学同人	同	信教育会	エリ・エム・化学工学の数学的方法	東京図書
鈴木隆	自動制御理論演習	学蔵社	友野理平	環境汚染計測とその対策	オーム社	平岡正輝・他	移動現象論	朝倉書店
三宅義興	最新大電力発電所の計画、設計と運転	電気書院	井伊谷潤一	粉体の物性と工学	化学同人	三野野博司	自動設計とプラスフィックス	大河出版
垂井康夫	トランジスタの使い方	産報	金橋良彦 他	表面科学Ⅰ	朝倉書店	電気学会通信	電子計算機の原理と構造	電気学会
渡部弘之	やさしい電子計算機	同	術講座1	同Ⅱ	同	信教育会	市外電話伝送	地人書院
大塚麻	安定化電源回路の実験	同	同2	同Ⅲ	同	関根弥五郎	フォートラン、テキスト	コロナ社
小茶典吉	すぐ役に立つトランジスタパルス回路	同	同3	表面研査法	同	木村久男	第1, 2, 3, 4巻	電気通信協会
片方善治	トランジスタ増幅回路の設計法	同	同4	被覆形成技術	同	日本電信電話公社	電子計算機とプログラミング	同
山中一郎	やさしい光電素子の応用	同	同5	電メッキ技術	同	セイバス	プロセス工業における計算機制御	電気学会
藤森聡理	やさしい超音波の応用	同	同6	陽極酸化	同	電気学会通信	自動制御理論	電気学会
高木克己 他	わかりやすい半導体物性	同	同7	無電解メッキ	同	信教育会	電子回路Ⅰ	朝倉書店
岡崎嘉善	わかりやすいプログラミング	同	同8	C・L・Man-tell	技術堂	電気学会通信	電気材料	電気学会
塩沢政長	わかりやすいシンクロスコープ測定法	同	同9	電気工学年報 昭和44年版	電気学会	山本賢三・他	電子回路Ⅱ	朝倉書店
原宏	わかりやすいブリッジ回路	同	山下善太郎	交流機器の理論と設計 上	新思潮社	電気学会通信	電気回路Ⅲ	朝倉書店
関口存雄 他	わかりやすい集積回路	同	同	同下	同	信教育会	電気材料	電気学会
今井篤	わかりやすいエレクトロニクス計測法	同	久保俊三郎	構造力学演習	学蔵社	信教育会		
伊東祐弥	わかりやすいFM技術	同	玄忠	ひずみゲージ入門	コロナ社			
天野橋太郎	エッセイダイオード	同	福島三七治	コンクリート強度に応じた丸骨鉄筋コンクリートの計算表				
風間茂徳	トランジスタ高周波回路の基礎	同	藤島謙一・他	新しい軟弱地盤処理工法	近代図書	小茶宏	日本の真珠	古今書院
田中章典 他	エレクトロニクス製図法	同	同	新しい土留工法	同	三井信夫・他	農芸化学実験書 第1巻	産業図書
伊東祐弥	実用トランジスタ増幅回路集	同	村上水一	土・基礎・構造物の設計・施工上の失敗例と解決方法	同			
小西良弘	マイクロ回路の基礎知識	同	川又晃・他	デジタル回路	オーム社			
片方善治 他	トランジスタビデオ回路の設計法	同	森口憲一	JIS Fortran入門 上	東京大学出版会			
鶴沼謙秋	トランジスタOTL回路の基礎	同	石田峰久・他	電子計算機	昭晃堂	浮世給12	役者録Ⅱ	毎日新聞社
同	トランジスタOTL回路の設計法	同	日本学術振興会	金属材料の強度および疲労資料集	丸善	入江泰吉	古色 大和路	保寿社
細田悦貴	トランジスタ デジタル回路	同	川下研介	熱伝導論	オーム社	鈴木道・他	江戸図解風情	平凡社
戸来晃一	トランジスタ直流増幅器	同	星子章男	パルス符号通信	丸善	現代世界界	ルドン・ルソー	集英社
今井聖	トランジスタDA、AD変換器	同	山崎英成・他	MOS-ICとFET	電報	術全集10		
風間茂徳	トランジスタ高周波回路の実際	同	河野政治	新編 無線通信工学Ⅰ(II)	森北出版	花田敬一・他	スポーツマンの性格	不味堂
山崎英成 他	MOS-ICとFET	同	電子展望編	トランジスタ回路アイデア	誠文堂新光社	岡部平太	スポーツと神の話	同
電気学会通信教育会	送配電Ⅰ、Ⅱ	電気学会	渡部和	線形回路理論	昭晃堂	土居次義	近代日本絵画の研究	美術出版社
角川一治	新編 送配電Ⅰ	東京電機大学出版局	片方善治	パルス応用工学	電気書院	坂崎乙郎	夜の備忘録	造形社
安達達 他	新訂 送配電工学	学蔵社	式部幹・他	伝送回路入門	東海大学出版会	堀内敬三	定本 日本の車載	実業之日本社
前川幸一郎	送配電	東京電機大学出版局	松前重義	電気通信概論	同	フリートリ	ルネサンスとバロックの音楽	白水社
			河合内郎・他	トランジスタ回路の解説	同	花田敬一・他	スポーツマンの性格	不味堂
			平田信二・他	電子素子および部品	朝倉書店	朝比奈一男	スポーツの科学的指導Ⅰ	同
			田中幸吉・他	電気回路Ⅰ、Ⅱ	同	パレーボール		
				ズバリわかる、半導体の応用と回路集積回路技術すべて	同	P C マキ	スポーツと社会	同
					同	ントッシュ		
					同	フランク・D	ウエイト・トレーニングの理論と応用	同
					同	野口義之	教師のための体育測定	第一法規
					同	京口和雄	体育科、主体的学習の実践明治図書	同

産 業

芸 術

岸正利	用語で覚えるスキー	不味堂	福田章二	喪失	中央公論社
金子明友	体操競技教本 I 平行棒編	同	住井すま	懐のない川 第1-4部	新潮社
同	同 II 鉄棒編	同	野間宏	青年の理3 表と裏と表	河出書房新 社
岡部平太	スポーツと樹の話	同	同	同4 影の領域	同
名典レコード	作曲家編	音楽の友社	同	同5 炎の場所	同
事典1			立原正秋	流通り	角川書店
同3	作品編下	同	明治文学全	堀井雨江、武島羽衣、大町筑聖書房	
同4	演奏家編上	同	集41	桂月、久保夫陸、荻川臨風	
同5	同下	同		樋口龍映美	
同6	レコード・オーディオ百科	同	上島金太郎	樋口一重とその周辺	笠間書院
全集	浮世絵歌謡	集英社	世界SF全	ウエルズ	早川書房
版画3			集1'		

語 学

F. J. Dan	英文を書くための辞書	北星堂	同2	ウエルズ	同
iels			同3	ドイル	同
市河三喜	他英文引用句辞典	研究社	同5	ワイリ、ライト	同
広田栄太郎	文章表現辞典	東京堂出版	同6	ステープルドン、リュイス	同
中村一男	反対語大辞典	同	同7	スマイス	同
加藤常賢	漢字の起源	角川書店	同8	ペリャーエフ	同
	文法の起源1 文章の生態	明治書院	世界SF全	エレンブルグ、チャベック	同
	同2 読むことの技法	同	集9		
	同3 悉文の条件	同	同10	ハックスリイ、オーウエル	同
	同4 書くことの基本	同	同11	ハミルトン、ラインスター	同
	同5 これからの文章	同	同12	ハインライン	同
中野禮雄	実用産業英語	日刊工業	同13	ブラッドベリ	同
ハロルド・P	会談	日本生産性	同14	アシモフ	同
・ゼルコ		本部	同15	クラーク	同
金田一京助	明解国語辞典	三省堂	同16	スタージョン、ブラウン	同
小林節夫・	授業のための模範公用文例	公人社	同17	ウオクト	同
他			同18	ベスター、ディック	同
			同19	ウインダム	同
			同20	シマック、ブリッシュ	同
			同21	ポール、コーンズルース	同
				アンダーソン、ファーマー	
			同22	エフレモフ	同
			同23	レム	
			同24	ゴール、グロモア、ストル	同
				ガツキー兄弟	
			同25	バルシャベル、フリック	同
				フランチ	
			同26	オールティス、バラード	同
			同28	星新一	同
			同29	小松左京	
			同30	筒井康隆、野村浩、光瀬龍同	
			同32	世界のSF短編集、現代編	同
			同35	日本のSF短編集、現代編	同

文 学

現代日本文	大仏次郎、岸田國士、岩田筑聖書房	集			
字大系53	豊雄集				
同36	長興書郎、野上弥生子集	同			
	季刊英文学 第1-7巻	あぼろん社			
吉田精一	日本文学鑑賞辞典	東京堂出版			
同	近代詩鑑賞辞典	同			
大後英保	季語辞典	同			
窪田章一郎	和歌鑑賞辞典	同			
ソルジェニ	ガン柄様 第1、2部	新潮社			
ツイン					
三島由紀夫	花ざかりの森	講談社			
同	夜の仕度	同			
同	豊饒の海 第2巻	舞馬 新潮社			
同	同 第3巻・晩の寺	同			
同	同 第4巻 天人五衰	同			
同	剣	講談社			
石原博太郎	化石の森 上、下巻	新潮社			
北杜夫	どくとるマンボウ航海記	中央公論社			
同	どくとるマンボウ途中下車	同			
同	どくとるマンボウ昆虫記	同			
ソルジェニ	煉獄のなかで I、II	タイム、ラ			
ツイン		イフ			
庄司薫	白鳥の歌なんか聞えない	中央公論社			
松本清張	小説・東京帝国大学	新潮社			
北杜夫	どくとるマンボウ小辞典	中央公論社			